

鐵橋に鉄なしとは、

テナ

隅田川に架する永代橋アノ男性美の永代橋には何んと十二萬本の鉄が打ち込まれてあるが省線田端驛上に跨る跨線橋は世界に誇るべき鉄なし鐵橋である、昭和十年十二月完成したものだ、其の橋の長さは百二十五米幅は十三・六米世界屈指の熔接鐵橋と稱せられておる。其の架橋工事費二十六萬圓である、架けても架けても盡きないものは橋である、今は昔明治時代には隅田川には上は吾妻で、中が既橋、兩國、下つて新大橋、永代橋で五大橋と稱せられたが今では言問、駒形、藏前、清洲の四橋も架せられた次第であるが鉄なし橋はあるやなしや。抑も熔接工事はリベット打ちのあの轟々たる騒音を防止し、鐵の重量を軽減し且つ費用を節約するため近來建築方面でも造艦方面でも非常に注目されてゐる、しかし費用

の點から見るとまだ熔接工事が簡單に行かないので、それ程經濟とは云へない、又熔接手の技術如何に依つて熔接部の強弱が心配になる、橋などの場合には、熔接部の耐久力が弱いか強いかを簡單に試験し難い缺點がある。熔接術が發展し完備すれば應用範圍は更に擴げられるであらう。

と言はれて居る。吾人は青木楠男技師の健康を祈る。

鐵の誘惑溝蓋空し

鐵鋼價の暴騰、鐵、鐵、鐵にあらでは儲けなしと軍需工業景氣の煽りを喰つて鐵景氣が夏の青空に仰ぎ見る入道雲の如く湧き出した。アイアン、ラツシュの出現、あなおそろしや道路の側溝鐵蓋は地方で續々紛失する、それも道理ぢや一圓八十錢位の溝側が今ぢや五圓もする世の中ぢや此むきでは橋もなくする時勢が来るぢやないか東北のある處では鐵鋼景氣がいたいけな、

學童の臍裡にまで深く刻み込まれ二人乃至三人組の兒童が學校から歸ると靴を投出し我れ先にと鐵屑拾ひに血眼となる拾ひ集めた鐵屑は？ 一貫匁十六錢、三貫匁位は毎日拾へるんだヨ古バケツにどつさり詰込んだ鐵屑を仲良く吊り擔いでヨイショ〜と屑屋へ急ぐ姿が日一日と激増して行く情景を見るとの事である。

我輩は犬である

「我が輩は猫である」の向ふを張つての事ではないが吾々犬の立場から絶叫しなければならぬ。永田町高臺ならぬ板塀の下から……國家の干城である軍が極く少數ではあるが無暗に味方の重臣に咬付いたのはツイ一年前の事であるが——吾輩犬族は狂犬ではない限り、やたらに人に咬みつくものではない「喜怒哀樂」を表現することを得ない「愛して頂戴ね」と言ふのにも唯ワン〜と云ふのみに人類には聞へるであるうが忠犬

八公ならずとも職務に忠實なることは熱心なものである。故に時に職務に忠實なるの餘り周到な注意を缺く事のなきにしもあらずである、顔面神經を働かすことを許されない吾輩犬族は婦人以上に眼に物をいわせるのである、夫れでうつら／＼としておる時、物賣り強請など物騒な男が、時々やつて来るので、餘り突然に戸をガラリと開かれたりすると、つい咄嗟の判断を誤つて咬みつくことも生ずる次第である。わが輩ら犬族も、御家守護の公職に携はつてゐることを御含み下さつて、今後はわれわれの「ワン」や「眼」に一應御注意下さい。

ありやなしやの珍聞

奇譚

○甘柿禪寺丸の由來、今を去ること七百二十三年前源實朝の時代である、秋深い武藏國都筑の里である。平禪寺本堂再建の用材を求めて等海上人は今日も亦寺領九十九谷

の細道を辿り奥深く分け入つたのである、渴を覺えて落葉踏み分けつゝ谷川に下つた上人の口から「オオ之は見事ぢや」と紅葉累々枝もをわわな熟柿を見付けて思はず感歎の聲をあげた、春風秋雨七百年甘柿禪寺丸は繁殖し今日の隆盛を來たしたのである

○戸塚の一本松 神奈川縣鎌倉郡川上村柏尾の東海道の道側に一本の古松がある。此の松は昔時の東海道の並木の名残りで樹齡まさに三百年から四百年位で、高さは十間餘り、東京から箱根の險を越ゆるまでにこんな枝振りのよい松はない古松ながらも青々と茂つておる、差渡しは一丈六尺餘枝は百坪位南側に張つて居る、三好農學博士が實地調査をされて褒めそやして居ると云ふ

○鼈の木乃伊 山口縣玖珂郡鳴門村で石灰小屋の中から發見された木乃伊は鼈が大口を開いて苦悶してゐる生けるが如き姿であるとの事で中々の珍木乃伊との評判である

○日本一の蟻の塔 栃木縣下都賀郡大宮村

樋の口の某家で味噌庫の中に高さが七尺餘の蟻の塔がある、少くとも百年以上を経過したことは八十年前已に七、八寸の高さに積み上げられて居つたとの事である、さすがに勤勉休むことなき蟻の働きの結晶である、學ばざるべからずである。

○蝙蝠の珍型 靜岡縣下田町岩下の石切穴に白いエリ卷の蝙蝠の珍型のもが群生して居るとの事で文理科大學でも研究中である、東京高等師範の下泉教授の話によると「富士の西湖の沿岸にある天然紀念物の蝙蝠穴、賀茂郡川津濱の密集穴を視察したのが富士にはウサギの如き耳の長い兎蝙蝠が五匹、川津濱には二三百匹いただけで此岩下の一萬匹の大密集に比ぶれば問題でない、エリ卷蝙蝠もこゝ丈で他には絶対にないののであると、エリ卷人類は目に餘つて研究の價値はないが此蝙蝠はさすがに珍の珍なるものである。

○異説夜泣松 東海道は小夜の中山に今は

國道の斷崖上に在る夜泣石は傳説のまことしやかに傳へられて佛力のあらたかなるを致へて居るが佐々木清治氏の調に依ると夜泣石以前に已に夜泣松の由來があり、暗夜衝きあたることもなかつたので夜無石と稱せられてゐた、路傍の丸石に夜泣松の枯死後、享保年間の頃傳訛附會していつとはなしに有名な子育、仇討の傳説を生んだらしい經緯を想ふときの傳説の創造としても面白く裁判沙汰解決への一示唆ともならうかと夜泣石には泣くに泣れぬ破目となつたのだ。

錯覺を訂さなければならぬは着物ばかりではない

婦人が着物を着ることを以て最上生活であるとか考へるのは大錯覺である、こんな優越感は實に婦人生活に禍しておる大なるものである、着物の價は反物でなくて着物に

なつてからのことである、處が錯覺は着物ばかりぢやない、婦人と云はず、男子といはず錯覺があつてはならぬ例へば時勢に對してもそうである、東京某紙の二月二十六日の記事で錯覺を是正し得る所が少なくなつた、其の記事は斯うだ。アノ日（昭和十一年二月二十六日）岡田内閣は崩壊した、三月九日に廣田内閣が成立した、此時軍は肅軍の内面爆撃を開始し、庶政一新への陣痛が始まつた、馬場財政三十億圓の尨大豫算の芽が用意され「日本再建」のタイトルが國民大衆の眼のまへにブラ下げられたのである、高橋財政から馬場財政へ、夫は二十三億から三十億への飛躍であり、非増税に對する増税斷行であり、公債漸減を破棄する公債發行増加であり、さらに國防抑制から國防充實促進へ……混沌日本のステツプが漸くにはつきりしはしめた。ころは、國民の財布から小錢が急テンポで消えてゆくとときであつた、タバコがあがる、砂糖が

炭が米があがつた、あがつた、そして再びタイトルは國防第一主義へ。……斯うして年があけた、昭和十二年、政黨軍部對立の深刻化は廣田内閣では收拾できなくなつた——廣田内閣濘暗、宇垣大將が組閣の蟻地獄に没入し去つた後に林大將のヒゲが露出された——林内閣、一年間に三度目の内閣である——だが一年まへ、銃劍の林に揺り動いた白壁の議事堂に政黨はやつぱり居眠りをして居る——つまり今日昭和十二年二月二十六日である、謂つて見れば二・二六の暗黒はどうやら薄明になつただけである一年間の血みどろな日本の努力はまだ希望の陽光をさへ迎へ得ないまゝである、このまゝで新らしき日本ははたしていつ開花するか？ 銃劍の嵐の二・二六一周年眼をつぶれば、なにかもひとつの時代の新たなる胎動が微かに國民の鼓膜を搏つのであるか……と噓躍進の日本、革新の日本新興の日本よ安産せよ。